
ONE PIECE 13人の悪魔

kurogane

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ONE PIECE 13人の悪魔

【Nコード】

N5515U

【作者名】

kurrogane

【あらすじ】

偉大なる航路最凶グランドラインの賞金稼ぎ集団 ディアボロス。またの名を13人の悪魔集団を束ねる頭 トーマたちとあるきっかけをかわきりに、麦わらの一味との戦いが始まる。そんな中、麦わらの一味は13人の悪魔の中に最強の超人系パラミシアの能力者の存在を知る

第1話 聖地マリージョア

赤い土の大陸

聖地マリージョア

タタタ

城の案内人についていく2人の男がいた

1人は頬に傷がある着物を着た男。その後ろに小柄で可愛い男がついていた

案内人「こちらです」

ガチャ

案内人はドアを開くと2人は部屋に入った

小柄な男「おカシユラ！見てみてすごいシユラ！」

そこは広い部屋でガラス張りの水槽があり、その中で優雅に魚たち

が泳いでいた

頭「黙れ。デュララ」

頬に傷がある男（頭）が小柄な男に言った

「よく来たな。まあ座れ」

そこには机の前でどっしりと座る1人の男がいた
2人は近くのソファに座った

頭「世界政府の総帥が俺たちになんのようだ？？」

その男は世界政府 全軍総帥 コングであった

コング「お前達の名は聞いている。私からお前たちに頼みがある」

デュララ「頼みってなにシュラ！」

頭「黙れ。デュララ！」

コング「政府側についてはくれないか」

頭「それはどういう意味だ??」

コング「言葉の通りだ。お前達の働きで名だたる賞金首を打ち取る事ができた。世界政府への貢献度は極めて高い」

頭「そりゃあ。七武海になれって事か?野蛮な海賊共と一緒にするな!」

コング「もちろん違う。お前達には特務部隊として私の下で働いて欲しい」

頭「特務部隊ねえ」

頭はソファに深く座ると腕を組んだ

頭「噂のCP9の穴埋めか?政府側も必死だな」

コング「まあそう言うな。YESか?NOか?答えてほしい」

頭「魅力的な話だが答えは、NOだ。俺たちもビジネスでやってんだ。それにプライドもある。自由があつてこそその人生だ。誰にも邪

魔されたくない」

コング「そうか。非常に残念だ」

すると頭は立ち上がった

頭「行くぞ！デュララ」

デュララ「シュラ！」

頭が歩きだすとデュララはそのあとをついていった

コング「トーマー！」

するとコングが頭を呼び止めた

コング「ドラゴンに息子がいると言ったら驚くか？」

トーマ「息子？」

コング「ドラゴンとの因縁は知っている。その頬の傷もドラゴンにつけられたものだろ」

「トーマ」……」

「コング」息子の名はモンキー・D・ルフィ。海賊だ」

「トーマ」ルフィ？どこかで聞いた名だな。デュララ！」

トーマがデュララに合図すると、デュララはすぐさま手配書リストを取り出した

デュララ「ちょっと待つシュラ…え」とルフィ。ルフィ。っと！あったシュラ！」

デュララはリストをトーマに渡した

トーマ「懸賞金3億。麦わらのルフィか」

デュララ「麦わらの一味は少数だけど、全員賞金首の超新星シュラ」

トーマ「超新星ね」

そう言つとロングの顔を見た

トーマ「俺の狙いはあくまでドラゴンだ。こいつは関係ねえよ。行くぞデユララ」

デユララ「シュラ！」

そう言つと2人は部屋をあとにした

政府用人「よろしかったのですか？機密をもらして」

ロング「いずれ皆知ることになる」

聖地マリージョア
城外

トーマとデユララはゆっくりと歩いていった

「トーマ」デユララー！

デユララ「シユラ？」

トーマ「みんなにデンデンムシで伝える。“麦わらの一味”を潰す」

デユララ「了解シユラ」

そう言いつとデユララはデンデンムシを取り出した

トーマ「お前の息子がどれほどか。試させてもらつてぞ。ドラゴン！」

第2話 マーチ

3日後

偉大なる航路^{グランドライン}

サウザンドサニー号

ナミ「たいへん！みんな来て！」

航海士ナミは新聞を見るとクルーを呼んだ

ブルック「よほほほ！どうしました！ナミさん。それよりパンツ見せてください！」

ドスッ

ナミ「あんたはすこんでて！！」

ナミはとっさにブルックを殴り飛ばした

ブルック「よほほほ。手厳しい」

ブルックは横たわりながら言った

ナミ「みんなこの記事見て!!」

ナミの一声で一味全員が甲板に集まった

フランキー「こりゃいったいどういうことだ?」

フランキーはその記事に疑問を持った

アラバスタ王国王女、マリージョア凱旋中謎の失踪

ナミの広げた新聞の記事にでかどかと書かれていた

ナミ「同王女は前にも失踪をしており、原因は不明である。海軍は

誘拐を視野に捜索中であり。王女の安否が無事であることを祈っている…」

ナミは記事の内容をたんたんと言った

ウソップ「これってもしかして！」

サンジ「ビビちゃんじゃないか!!」

ルフィ「なんでビビが!!大丈夫なのか！」

ロビン「この記事だけではなんとも言えないわね」

ヒュルルル

するとサニー号の上空から何かが落ちてきた

ゾロ「なんだ!ありゃ!!」

ウソップ「とりー！でけえとりだ！」

ルフィ「わわわ」

ガシャン

真っ逆様に降下してくるそれは、ルフィの上に落ちた

？「いてて」

??「チキン！大丈夫??」

落ちてきた怪鳥の影から男女の2人組が現れた
メガネをかけた知的な女性は怪鳥に向かって話した

チキン「グエ…」

メガネの女「もうむちゃさせすぎなのよ！」

メガネの女はもう1人の男に言った

？「いいじゃね〜か！助かったんだし」

メガネの女「よくない！！」

メガネの女は怒鳴るように言った

？「うう〜こわッ！」

ギロツ

メガネの女は鋭くにらめつけた

メガネの女「なんか言った〜？？」

？「う…うめんなさい」

メガネの女「はあ〜マーチについてくるとロクなことない…」

メガネの女は頭を抱えながら言った

ナミ「ちょっと取り込み中悪いんだけどさ…うちの船長踏んでる」

ナミは2人の間に入ると踏みつけているルフィを指差した

2人組「えっ！」

2人は足元を見た

メガネの女「ごめんなさい」

マーチ「大丈夫か！」

ルフィ「はいじょブ…」

ルフィは力なく言った

ウソップ「お前たちいつたいなにもんだ??」

マーチ「俺か？俺はさすらいの賞金稼ぎ。マーチ。こいつはナタル」

マーチはメガネの女を指差しながら言った

ナタル「よろしくです」

マーチ「それとこいつが怪鳥 チキン。俺の相棒だ」

チキン「ゲエ！」

サンジ「賞金稼ぎ？」

フランキー「こりゃちとマズいんじゃないかねえ」か

ロビン「本当。不運ね」

ブルック「ヨホホホ」

ゾロ「お前ら。あれ見えてるか？」

ゾロはメインマストの海賊旗を指差した

マーチ、ナタル「はっ！」

マーチ「海賊船じゃね〜か」

ナタル「どうすんのかよ」

マーチ「まあとりあえず飯食つか！！」

麦わらの一味「うおい！」

マーチの一言に一味全員がツッコミを入れた

第3話 宴会

マーチ「よし！ナタル。積んである食料持ってこい！！」

ナタル「ないわよ」

マーチ「ええ！なんで？？」

ナタル「昨日、あんた全部食べちゃったじゃない」

マーチ「なぬ〜！くそ〜じゃあチキン食べていい」

チキン「グエ！！？」

チキンは怯えるようになりアクションをとった

ナタル「あんたさっき相棒って言ったじゃない。ダメよ。チキンは非常食じゃないの！」

マーチ「あたりまえだ！相棒は食べない！」

マーチは涎を滝のように流しながら言った

ナタル「じゃあその涎をしまいなさい！」

スタタ

するとサンジが軽快なステップでナタルに近づいてきた

サンジ「ああ、麗しの美女よ。私はあなたに出会うために生まれてきた。よろしければどうぞ」

そう言ってサンジは紅茶を手渡した

ナタル「あ……ありがとう」

マーチ「お前やめろ！ナタルは惚れやすいんだぞ」

ナタル「余計な事言わないの！」

ナタルは顔を赤らめながら言った

ルフィ「はらゝ減ってんなら。うちでこ馳走してやるよ」

ルフィが腕を組ながら言った

ナミ「ルフィ！相手は賞金稼ぎよ！」

ルフィ「別にいいじゃね〜か。ちょうど俺も腹減ってたし」

サンジ「麗しのナタルちゃんのためなら何でも作るぜ」

サンジはそう言って厨房に乗り出した

マーチ「いいのか!」

ルフィ「おお！いいぞー！」

ナタル「マーチはうちで1番の大食いなの。それでも大丈夫?？」

ウソップ「平気だよ。うちの船長も大食いだから」

ナタル「へえ〜」

ルフィ「よっしゃ！宴会だ〜」

麦わらの一味 マーチ達「おお！！」

ルフィのかけ声にみんな答えると宴会が始まった
甲板に机が並ぶと次々と料理が運び込まれてきた
みんな飲んで食って騒いで笑顔で満ち溢れていた

マーチ「うめえな！こんな飯始めて食ったぞ」

サンジ「あたりめえだ！一流のコックを舐めるな！」

料理を運んでいるサンジが答えた

ナタル「あ！今のうちに！」

ナタルは服のポケットをあさった

ナミ「どうかしたの??」

ナタル「仲間に連絡を取って迎えにきて貰おうかなと」

そう言っ子電電虫を出した

プルプルプル

ガチャ

ナタル「あ！私！ナタル！迎えにきて！」

??「とつとつ過ぎるシユラ。今どシユラ？」

ナタル「今?ご飯ご馳走になってる」

??「マーチと一緒にこつち向かってたんじゃないシユラか??」

ナタル「マーチがチキンにむちゃさせるから海に落ちそうなところを、
たまたま海賊船の上に落ちて今ご馳走になってる」

??「のんきシユラね。おかシユラ！ナタルが迎えに来て欲しいって言うてるシユラ……ダメだ寝てる。とりあえずビブルカードたどつてそつちいくシユラ」

ナタル「わかつた〜ありがとう。デュララ」

ガチャ

ナタル「なんか迎えきてくれるみたい」

フランキー「仲間って〜のは同じ賞金稼ぎなのか？」

ナタル「ええ。私も入れて13人いるの」

ゾロ「13人……」

ブルック「ゾロさん。どうかなさいましたか？」

ゾロ「……」

ゾロは1人考えこんでいた

チョッパー「大丈夫なのか？俺たち海賊だぞ？」

マーチ「大丈夫。タヌキはくわね〜から」

ガン

ナタルはマーチを蹴飛ばした

マーチは蹴りをくらうとその場から吹き飛ばされた

ナタル「あんたはちよつと黙って」

マーチ「ずッ…すみません」

ナタル「私たちはリーダー主体のチームなの。リーダーが決めた目標としか戦わないの」

チョッパー「へえ」

ナミ「珍しいわね。賞金稼ぎでもっとガツガツしてる奴ばかりだと思ってた」

ナタル「まあガツガツはしてるかもね。うちのマーチは食いしん坊だし」

マーチ「ナタルは惚れやすいいな」

チキン「ぐえ！ぐえ！」

マーチ「どうした！チキン！」

チョッパー「マーチは幼稚で下品だって！」

マーチ「お前、動物と話せるのか！すげえな！」

チョッパー「そんな誉められたってうれしかねえよ」

チョッパーはテレを隠すように変な踊りをしながら言った

マーチ「それよりチキン！誰が幼稚で下品だ！」

チキン「ぐえぐえ。ぐえ〜」

チヨツパー「本当のことだろ。だって」

マーチ「くう〜もうお前とは口きいてやんねえ！」

チキン「ぐえ〜！」

チヨツパー「俺だって！きいてやんねえよ！だって」

サンジ「鳥とは口きけねえだろ！」

マーチ「うるせえ！」

チキン「ぐえ！」

マーチとチキンは口を揃えて言った

ルフィ「わははは！お前らおんもしれくな！」

宴会は昼間にもかかわらず楽しく時が過ぎていった

第3話 宴会（後書き）

よかったら短編小説も読んでください笑

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5515u/>

ONE PIECE 13人の悪魔

2012年1月12日01時50分発行